SPACE No.47

日本臨床心理身体運動学会会報第 47 号　　2025 年 11 月 20 日

編集発行　日本臨床心理身体運動学会　会長　山中康裕

【第 80 回研修会・第 51 回講習会】

2025 年 9 月 15 日（月・祝）に、浜松市のクリエート浜松において、第 80 回研修会と第 51 回講習会が、対面及びオンラインのハイブリッド形式で開催されました。発表者ならびに参加者（対面及びオンライン）から、コメントを頂きました。発表や事例を聴いた後には様々な連想が浮かび、出来ればそれを誰かと共有したくなりますが、この紙面においてそれが出来ればと思います。

「私は何者？」～第 80 回研修会で事例を発表して～

根木　明子（NPO 法人　K-Son's　Partner）

私は、教員という職業にしか就いたことがないので、一般企業だとか或いは自営業だとかの方の視点などというものは、まったくわかっていない。親戚の集まりで警察官のいとこに「学校の先生、元気」とか言われると、そんなに私は学校の先生面をしているのかと何とも言えない気持ちになる。というわけで、10 年ほど前、心理臨床の門をくぐった私だが、実のところ臨床心理士の資格を持った“学校の先生”からさっぱり動いていないのだろうと思う。今の職場で机を並べている心理士から「根木さん学校の先生だもんね」と言われるとその確信はさらに強まる。

そのような思いの中、第 80 回研修会で、学校現場で行ったこどもとの事例を提供させていただいた。

そもそも学校現場で心理療法を行うことは難しい。学校文化の中で心理療法の理解が十分でないこと、心理療法について訓練を受けた人間がほとんどいないこと、できる可能性がある SC には、継続的な心理療法は求められてないことなどは言うまでもない。現実的な問題として、時間や場所といった面接構造を維持するのが非常に困難ということも無視できない。私が心理療法の行う上で面接構造を維持できたのは、通級指導教室担当者という立場ゆえである。

私は、この面接構造を守るために、できるだけの努力をしてきたように思う。実際に出会うこどもたちの中には、読み書きを教えるより先にしないといけないことがあるだろうと思うこどもがいるからである。しかし、そこは“通級”という“学習の場”を任されている以上、保護者や学校のニーズを無視するわけにはいかない。教員として“教える”ことがあれば教える。教えた後に、教員とは違うスタンスでこどもと過ごす。長年積み重ねてきた“経験と知識”で、ある時は“臨床心理士“という名称を前面に出し、ある時は”発達支援教育コーディネーター“として学校の面倒ごとを引き受けて、自分の自由にできるフィールドを広げた。そうするうちに、教室に箱庭を置いたり、大きな声を出して遊んでいたりしても、誰も何も言わなくなった。

だが、こんなふうにして行った事例を“セラピー”と言うことができるのか。その事例の中で私は、“学校の先生”なのか“セラピスト”なのか。今回、提供した事例で戸惑ったのは、私自身をどう表

記するかだ。どっちつかずの立場でいることは、面接構造の説明をすればフロアにすぐにわかってしまう。きっと、誰か突っ込むだろうと内心ヒヤヒヤだ。真っ正直に語ったら「これって教育じゃない？」と言われ「まあそうですね」と返すしかないだろう。実際、教室に入ったら「(授業を）始めます」と言い、文字の書き順や読み方を“教え”、赤ペンで丸を付けているのだから。そして、時間の終わりには「感想カード（担任との連絡用の）を書きましょう」と声を掛ける。もうこれは、完全に“学校の先生”だ。だから、“セラピー”をしている（と私が思っている）途中でもうっかり“学校の先生”になっていないとも限らない。怪しいところだ。こどもと会っている私は“学校の先生”なのか“セラピスト”なのか。“セラピー”をしているといって本当によいのか。学校での事例を提供するとき、私は本気で悩んでいる。

第 80 回研修会・第 51 回講習会に参加して

島田　愛乃（静岡県スクールカウンセラー・菊川市立総合病院）

2025 年 9 月 15 日クリエート浜松にて行われた第 80 回研修会・第 51 回講習会へ参加させていただきました。当日は雲一つないような快晴、空が果て無く感じられる朝でした。駅から歩く道中、影を探して何とか日差しをしのいで会場へたどり着いたことを覚えています。

午前中の講習会におきましては、岸本先生からの『がん患者の痛みと競技者の痛み』というご講義を拝聴させていただきました。“痛み“というものを扱いながら、これまで行われてきた研究や事例を通して様々なお話を聴かせていただきました。事例ではエビデンスだけでは語ることのできない、けれども世界の中で確かに存在しているものが大切にされるあたたかさを感じましたし、医療と臨床心理が繋がりをもち、世界が開けていくようなイメージを持ちました。また、風の谷のナウシカの中から地水火風、色、音の重なり、多層的な視点から語られた言葉の数々から、自分の中でも考えが広く深く展開していきました。質問者とのやり取りの中では、傷ついた治療者について触れられ、それが切なくもあり、ただそこに確かにある存在を認めてもらったような気もしました。また、午後の研修会の際には講習会の話題のつながりから、宇宙が痛がる、それを感じるか、ということに話が及び、果てしない広さの前に立ったような心境にもなりました。講習会と研修会の内容との重なりも様々な場面で感じました（これは臨心身の研修会講習会に出た際毎回のように思う不思議さです…)。

午後の講習会では大学院同期（であり、人生の先輩！！）の根木さんが事例発表をされました。事例を聴いていく中で、院生の頃のあつい情熱を思い出すような、懐かしい気持ちになりました。と同時に、変わらない情熱で、場を選ばず、その置かれた環境の中でこんなことまでできるのだと、ハッとしました。それは、自分の枠組みの中でそのクライアントの方と出会い動き出していく、クライアントの方と生み出される彩りが鮮やかに輝くような関わりでした。同期として私はこれまで根木さんのお仕事について聞いていましたし、他の事例も聴かせていただいたことがあると思うのですが、今回はとても新鮮に感じました。勝手に知ったつもりになっていた自分を恥じ、さらに、果たしてこのようにクライアントさんと真摯に向き合えているだろうか、と自分の日頃の臨床を見つめ直すことにもなりました。自分自身はどういう場であるかを気にしすぎているように思い、自分の枠組みをもう少し広げてもよいのかもしれないと、自由さを得られたような不思議な心地よさが残りました。自分はどのように生きていくのか、という果てしない問いを与えられたようでもありました。研修会、講習会後も、あの日の空のような果てしなさを思いながら過ごす日々が続いています。

痛み、出会い、変容――第 80 回研修会・第 51 回講習会に参加して

木野　徳子（溪蓀塾心理教育相談室／フリーランス翻訳者）

久々に学会研修会・講習会に参加できました。ぜひにと願っていて直前に都合がつき、ギリギリの

申し込みになってしまいました。ご対応くださった先生方に心からお礼申し上げます。

研修会は岸本寛史先生『がん患者の痛みと競技者の痛み』。岸本先生の「心理臨床の知見を（西洋科学的な）医学の知見ときちんと結びつける努力を続けるべき」という言葉を、私はお聞きするたびになぜか心が動かされます。今回も、もしかしたらこの言葉にまた直に触れたくて参加したのかもしれません。心理臨床の深いまなざしを持つ先生から、確かな医学的知識を学べる機会があることを、ほんとうに有難く思います。最近の自分は、難しさに腰が引けて、あるいは頭でっかちになることを恐れて、知識を得る努力を怠っていたのではないか。知識に流されないように重々用心しながら、一つでも二つでも知識を身に付けたい、と思い直しました。

帰宅後に浮かんできた連想をいくつか綴ってみます。

(1)「プラシーボ効果が現れる時は実際に体内で変化が生じている」――昔どこかで読んだ実験の話を思い出しました。催眠状態の人に「腕にタバコの火が近づけられる」と伝えると、実際に火傷の水膨れが生じることがあるとか。今は倫理的にできない実験だと思いますが。

(2)「偽薬なのに副作用が出るノーシーボ効果」――日本語では「反偽薬効果」。ふりがなを振ると「はんぎやく効果」、偽薬が人に牙をむく「反逆効果」とも取れる？

(3)『風と谷のナウシカ』――岸本先生が語られる『ナウシカ』の色のイメージと変容の物語に圧倒されました。ナウシカについては、宮崎駿監督が原作漫画について「一人の少女にあまりにも大きなものを背負わせてしまった」とどこかで語っていたように思います。この原稿を書いている数日前、ガザに支援物資を届けようとした環境活動家のグレタ・トゥンベリ氏がイスラエル軍に拘束されたというニュースが（その後イスラエル国外退去に）。私には彼女がどこかナウシカと重なって見えます。また、『ナウシカ』の腐海にはモデルがあり、それはウクライナとクリミア半島の間に実在する「腐海」という湿地だと最近知りました。

物理的な痛みと社会的な痛み、個人の痛みと世界の痛み。物語に圧倒されたまま、さまざまなイメージが私のなかで交錯しています。

◇

午後の研修会は根木明子先生による教育現場での事例提供。プレイセラピーの力に胸を打たれ、今なおその余韻が残っています。

討論の中で名取先生がコメントされた二つの「we」――「明確な“我々”としての we」と「もっと曖昧な、具体的な人物ではない we」――について、私は十分に消化できないまま帰宅しました。その夜、ふと『いねむり先生』の一節を思い出しました。これは著者の伊集院静氏が人生の危機にあった頃、作家の色川武大（別の筆名・阿佐田哲也）氏＝「先生」と出会い、麻雀や旅打ちで時間をともに過ごす中で破滅から救われていく、その日々を振り返った自伝的小説です。思い出したのは次のくだりです。

旅打ちで一宮競輪場に行った二人が、夜、小さな食堂に入ると、女将と少年がいた。少年はテレビゲームを始め、女将が「困ったもんです」と愚痴をこぼすと、「いや、こういうものはあとで役に立つものです」と先生。食後に店を出て歩きながら“ボク”が「一人で遊んで面白いんですかね」と言うと、先生は「うん。遊びは一人遊びが基本ですが、あれは一人遊びじゃないでしょう」と答え、こう続ける。「今、日本全国でだいたい同じ時間に子供たちはあれをやるそうです。その様子を少し俯瞰すると、日本中の家々の屋根をはぐれば何十万人という数の子供が同じゲームをしてるようです。あれは皆と遊んでるんですよ」。

もちろん、今のような通信機能のないゲームの時代の話です。

ここで「皆と遊ぶ」から「we」という言葉に戻ると、こんな考えも浮かんできました。乳児に「わたしとあなた」という区別はない。幼児期から少年期へと成長していく中で、その we が相当程度「わたしとあなた」に分かれていかないと人間関係を作れない。少年は、根木先生とのプレイセラピーに支えられて、その分化の仕事をやり遂げた。そういう見方もできるのでは、と。

考えてみれば、『いねむり先生』も、麻雀や旅打ちという遊びを通じて癒し癒されていく大人のプレイセラピーの物語とも言えるかもしれません。読むたびにじんわり温かい気持ちになる小説です。そして私は、今回の根木先生の事例も、ふと思い出すたび、同じように心の奥がなんともじんわりとする温かさを覚えるのです。

［文献］伊集院静（2011).『いねむり先生』集英社 pp.117-118

第 80 回研修会・第 51 回講習会に参加して

浅野　友之（奈良女子大学）

2025 年 9 月 15 日に日本臨床心理身体運動学会第 80 回研修会・第 51 回講習会が開催され、今回私は事情によりオンラインで参加しました。この原稿を書いている今は幾分か期間が空いてしまっているのですが、当日は「今回は、自分の内側でどのような化学反応が生じるだろうか？」とワクワクしながら参加したことを鮮明に思い出します。

午前の講習会では、岸本寛史先生による『がん患者の痛みと競技者の痛み』のご講演を聴講しました。個人的なことで恐縮ですが、私自身かつてはそれなりに熱心に競技に取り組んでいたため、“どこかしらの身体の痛み”や“不調感”を抱えながらプレーすることが競技者としてある意味自然なことだと考えていましたし、それを「誰にも言わない、見せない」ということが競技者としての美徳だと考えている節もありました（今思えば、当時は少々偏った生き方であったという自覚はあります)。岸本先生のお話を聴きしながら自身の“痛み”にまつわるエピソードをあれこれ思い返していると、【じっと耐える、我慢する】という関わり方が圧倒的に多いことに気がつきました。そもそも、どうして自分は痛みを誰かに伝えようとしてこなかったのか？と自問してみたのですが、それはきっと「自分にしかわからないものだから」なのだと思います。

そのように考える一方で、自身の“痛み（体験)”との向き合い方から『他者の“痛み”の共感的理解へ』と繋げていく鍵を見出そうとする工夫・努力こそが自己研鑽であり、心理支援の要になるのだと連想を拡げておりました。ここ数年は、個人的な関心やいろいろな出来事も相まって【耐える、我慢する】といった従来の自身の“痛み”との関わり方から、【“痛み”が大事なことを教えてくれる】といった姿勢・態度へと変化してきたようにも感じます（肉体的変化、社会的変化の要因も大きいですが…)。今回の講習会で感じたことを受けて、この先に生じる自身の変化をじっくり味わってみたいと思います。

午後の研修会は、事例発表および討議ともに非常に濃密な時間を味わうことができました。その具体内容に関しては、ここで私が何かを述べることは野暮ですので控えさせていただきますが、私の中で特に印象に残ったのは午前の講習会テーマと深いところで重なり合う事例であったという点です。そのことに理解が及んだ瞬間、事例の理解も一層深まったような不思議な感覚を味わいました。心理支援において、いわゆる“問題”や“訴え”をどの水準で受け止める必要があるのか、今一度考え続けていきたいと思います。

取り留めもない参加記となり恐縮です。最後になりますが、このような貴重な学びの機会を提供してくださったすべての関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

編集後記

今回は参加できず、非常に残念な気持ちで、SPACE の編集を行っています。でもそれは逆に言うと、皆さんが非常に充実した講習会・研修会を過ごし、たくさんのことを考えられた、ということだと思います。頂いた皆さんのコメントには、それが溢れているように感じました。また次回は私も充実した会を満喫できればと思います。　　（仁里）

SPACE　　No.47
日本臨床心理身体運動学会　会報第 47 号
2025 年 11 月 20 日発行
日本臨床心理身体運動学会
会　　長　山中康裕
編集責任　仁里文美
事務局　〒600-8449
京都市下京区新町通松原下ル富永町 107-1
株式会社 木立の文庫内
TEL：075-585-5277
FAX：075-320-3664
E-mail：office@rinsinsin.jp